12月5日(月)

日本海新聞

23面

鳥取大医学部付属病院

ロボット手術普及へまい進

中国地方で唯一のロボット心臓手術関連学会協議会認定施設となっている鳥取大医学部付属病院（米子市西町）で、手術支援ロボット「ダビンチ」を使った手術が進んでいる。10月には日本初となる心臓の大動脈弁置換術を実施。今後もロボット手術の可能性を広げていく考えだ。　（田子菅樹）

ダビンチを使った大動脈弁置換術の様子（鳥取大医学部付属病院提供）

保険適用が課題

同病院では、できるだけ体を傷つけずに手術をすることで体への負担を最小限に抑え、合併症のリスクを少なくして手術後の回復を早める「低侵襲手術」を推進。2010年にダビンチを導入し、翌年にはロボット手術を核とした低侵襲外科センターを設置した。

■入院期間の短縮

ロボット手術はこれまで、直腸がんの悪性腫瘍切除術や、心臓に血液を供給する血管が細くなったり詰まったりした場合に迂回路をつくる冠動脈バイパス術など幅広く実施。この他にも新たな手術を行っており、臨床実績は2163件（10月現在）に上る。

同病院が新たに実施したのが、心臓が酸素豊富な血液を体全身に送り出す際、逆流を防ぐ役割を持つ大動脈弁が閉まらなくなる大動脈弁閉鎖不全症の患者に対する大動脈弁置換術だ。

11月24日の記者会見で、心臓血管外科の吉川泰司副診療科長は大動脈弁置換術について、患者への負担が少なく、術野の確保が難しい胸腔鏡での手術よりも安全が担保されると説明。退院までの期間は9日で、胸の真ん中を大きく切る「胸骨正中切開」の2、3週間より短かったという。

大動脈弁置換術　日本初、ダビンチ成功

体の負担とリスクの最小限化へ

■手術のリーダー

この手術法は保険適用されていないため、今回は手術に関する費用を同病院が負担した。心臓手術に関連する学会が、国に対して24年の保険適用に向けて働きかけている段階で、全ての患者に提供できないといった課題も残されている。

高齢化社会が進行する中、加齢で大動脈弁が硬くなって開きにくくなる大動脈弁狭窄症の手術に応用したい考え。原田省病院長は会見で「ロボット手術を病院の柱として進めてきた。より高度な手術を安全に、広く日本に普及するロボット手術のリーダーとして努力を継続していきたい」と話した。

ロボット手術による大動脈弁置換術を説明する心臓血管外科の吉川泰司副診療科長

健康相談室
鳥取県医師会Q&A

みんなの医療＋福祉　山陰の現場から

【質問】　37歳男です。10年ほど非びらん性胃食道逆流症に悩んでいます。症状は喉のつかえ、喉がいがいがムズムズする。ゲップが多めに出る。数カ月に一度食道から喉に灼熱感のような痛みが出る、などです。胃カメラは過去2回していますが、どちらも異常はとくに見られませんでした。今現在、久しぶりに受診して、薬を飲んでもう少しで1カ月ほどになります。喉のつかえは取れましたが、その他の症状がなかなか改善されません。ネットで調べると、非びらん性胃食道逆流症は薬が効きにくいと書かれていますが、やはりそうでしょうか？　薬以外に日頃気をつけることやすると良いことなどがありましたら教えていただきたいです。

食べ過ぎ、油もの控え 内服を継続しましょう
非びらん性胃食道逆流症

【回答】　非びらん性胃食道逆流症では、胸焼けや咽喉頭違和感などの症状を認めるにもかかわらず、内視鏡検査で食道の粘膜障害を認めません。ご指摘の通り治療に難渋することが少なくありませんが、びらん性胃食道逆流症の軽症ではなく病態の異なる点があると考えられています。

明らかになっていない所も多く、胃酸の分泌を抑える薬や消化管の動きを調整する薬で経過を見ていただくことが多いと思われます。効果が無い場合もいくつか選択肢がありますので、試してみることをお勧めします。

比較的まれですが、好酸球性食道炎というアレルギー反応に起因する食道炎でも似たような症状を来しますので、内視鏡検査の際に検討されているか確認をお願いします。一般的には食べ過ぎや油ものを控えることが勧められています。

（回答者　鳥取県東部医師会員・岡田克夫）

ご相談や質問は、はがきか封書、電子メールに、質問内容を要約し、年齢、性別、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記し、〒680－8688　鳥取市富安2丁目137、新日本海新聞社編集制作局報道部「健康なんでも相談室」係へ。電子メールアドレスは次の通り。gakugei@nnn.co.jp

短信

23日に心の健康フォーラム配信

県と県精神保健福祉協会

鳥取県と県精神保健福祉協会は、23日正午から「第31回心の健康フォーラム」をオンデマンド（ユーチューブ限定）配信を行う。参加費無料。申し込み要。

「コロナ禍のメンタルヘルス～災害と心のケア～」をテーマに、福島県立医科大災害こころの医学講座主任教授で、精神科医の前田正治さんが講演する。

対象は当事者や家族、支援者、精神保健福祉に関心がある人。ファクスで申し込めば、動画URLを通知する。配信期間は来年2月10日午後5時。問い合わせは電話0857（21）3031。

県社協情報BOX

歳末たすけあい運動にご協力を！

「歳末たすけあい運動」は、共同募金運動の一環です。新たな年を迎えるこの時期に、地域の助け合いや支え合い活動を支援、推進するために使われる募金です。趣旨は望まない孤独・孤立を防ぎ、安心して暮らすことができる「福祉のまちづくり」への理解と参加を図ることです。ボランティアや民生児童委員、社会福祉法人、NPO団体、社会福祉協議会などの関係機関・団体の協力で行われます。

子どもからお年寄りまで、みんなが一緒に安心して暮らせるまちづくりのため、皆さまの温かいご支援、ご協力をよろしくお願いします。

募金は窓口、振り込み、ネットで受け付けています。

問い合わせは電話0857(59)6350、鳥取県共同募金会。

ホッとひと息

旧い外科医のつぶやき

小林　哲　（鳥取県医師会副会長）

近年、外科手術は大きな変貌を遂げています。いわゆる低侵襲外科手術が急激な進歩を遂げています。30年以上前に硬性鏡、いわゆる胸腔鏡や腹腔鏡手術が始まり、現在では手術支援ロボットが急速に普及しています。

鳥取大学では全国の大学病院に先駆けてこれを導入し、現在ダビンチ2台に加えて国産の「hinotori」も導入して3台の手術支援ロボットを擁しています。

これにより多くの外科手術、胸部・腹部外科、泌尿器科、婦人科手術、さらには一部の心臓外科手術も低侵襲手術によって行われ患者さんに多くのメリットをもたらしています。

今までご高齢やハイリスクで手術不能であった患者さんへの手術が可能となりました。また術後の痛みや全身への影響が少ないため術後回復が極めて早いといったことです。

しかし都会の外科医からは最近、若い外科医の中にはスタンダードな開腹、開胸の手術経験が少ない外科医がみられるようになってきたとの声も聞きます。モニターを見ながらの手術では突発的な出血で視野が阻害されると何もできなくなります。

このような時に、いかに直視下の手術に切り替えの決断を下すのかも外科医の能力の一つです。全国的にはこの決断の遅れにより不幸な転帰を取ったと考えられる事例が時に報道されます。

もう一つは災害・外傷外科の現場では当然直視下での非定型的な手術を迅速に行う能力が要求されます。医療安全のため、外科医の「瞬発力」の養成にも心を砕いていただきたい、と旧い外科医としては老婆心ながら思う次第です。（境港市）

1982年、鳥取大学卒。鳥取県立中央病院心臓血管胸部外科、国立浜田病院外科、鳥取大学第二外科を経て、93年4月から小林外科内科医院理事長。